

1858年に福澤諭吉が江戸に開いた蘭学塾から始まった慶應義塾は、学生たちに「社会の先導者」たることを求めてきました。また慶應義塾大学の総合政策学部は、慶應義塾の精神と伝統を継承しつつ、新しい時代の要請に正面から応え、未来を切り拓くための力を持つ人材を育てることを目的に1990年に開設されました。総合政策学部は、問題発見・問題解決を掲げ、多様な背景や考え方を持つ人たちが協力して問題にアプローチし、よりよい未来を作るための方策を導き出す、様々なレベルの政策を考える学部です。

現実の世界に存在する問題は、いずれも領域横断的です。その問題の解決を目指し、社会を先導していくためには、まずは社会の現状を理解し、問題を的確に把握することが求められます。何が本当の問題かを知るのには簡単ではありません。その際には、今の社会を作り上げてきた思想や時代の変遷に目をむけること、問題を引き起こすこととなった経緯や原因を探るために歴史的視座を持つことが不可欠です。また、未来を切り拓く政策を考え実行するためには、発想力や創造力を養い、分析したり実践したりする力を身に着けると共に、先人たちの言葉や知の蓄積にあたり、そこから真摯に学ぶ姿勢もとても重要です。

この小論文は、皆さんの、過去の知の蓄積にアクセスする力、現在の社会に対する問題意識を踏まえた分析力、問題解決のための構想力や未来に向けた発想力を問うものです。【資料1】から【資料6】をよく読んで、以下の設問に答えてください。

【資料1】から【資料4】は、知識人をテーマにした論考です。各論者の視点や歴史的文脈は異なっていますが、いずれも社会との接続という観点から、知識人が担ってきた役割やあるべき姿について、また、彼らに対する批判が述べられています。【資料5】は、1875年に出版された『文明論之概略』の現代語訳です。福澤諭吉は当時の日本が直面していた課題を捉えて、文明の道を進むことを呼びかけました。【資料6】は、1992年に出版された総合政策学部の加藤寛初代学部長の著作です。当時の日本や学問、大学に対する問題意識とともに総合政策学部の理念が書かれています。【資料5】と【資料6】からは、慶應義塾の創設者である福澤諭吉と総合政策学部初代学部長である加藤寛がそれぞれ見出した各時代の社会課題と、それを乗り越えるために提示した解決策を読み取ることができます。

## 問 1

【資料 1】から【資料 4】に論じられている知識人の役割やあるべき姿、知識人に対する批判について、各資料の違いと特徴が分かるように 800 文字以内で要約してください。

## 問 2

【資料 5】を読み、福澤諭吉が当時の社会をいかに捉えて何を人々に訴えたのかを論じてください。さらにこれを踏まえて、今の時代に顕在化している社会課題の中であなたが重要と考えるものを一つ選び、その課題がどのようなものか、またその課題がなぜ重要なのかを述べてください。全体で 600 文字以内で書いてください。

## 問 3

あなたは、総合政策学部での学びを通じて、どのような「社会の先導者」を目指し、問 2 で論じた課題にどのように向き合っていきますか。【資料 6】に示された総合政策学部の理念を踏まえて、また、【資料 1】から【資料 4】に示されたかつての知識人像や【資料 5】に示された福澤諭吉の考え方も必要に応じて言及しながら、600 文字以内で書いてください。

## 【資料 1】

科学技術の時代には、知識人の威信は必然的にイデオロギー装置として行使される。とくに社会科学や行動科学が、国策を擁護する役目、あるいは特別な利害を隠す仮面としての役目をさまざまな方法で担うことは避けがたいことである。問題は単に、知識人が自らに威信と富を与えてくれる社会の中で、今日「<sup>プラグマティック</sup>実用主義的な姿勢」とは、批判的に分析したり、改革に奮闘することではなく、国内あるいは海外の現状の権力分布と、そこから生じる政治的現実を「容認」して、技術的かつ段階的な方法で「緩慢な改善策」を繰り上げる立場に強く魅せられているというだけではない。また「<sup>プラグマティック</sup>実用主義的な姿勢」という立場をとることによって、あらゆるたぐいのイデオロギー的な正当性が与えられることを期待して強く惹かれているわけでもない。むしろ、私たちが同時に想起しなくてはならないのは、政治的なエリートが、批判的な分析から自分たちを守るために社会科学や行動科学の用語を使おうとすることなのである。考えてみれば、どんな特殊な行為についても、その妥当性や現実性を厳格に証明しようとする専門家が、大学には必ずいる。これは推測の問題ではない。外国政府が自分たちの命令を受け入れないのなら、人類の四分の一にあたる人々が集団的な飢餓に陥るのも致し方ないと、指導的な立場にある政治学者が議会で証言するのを、私たちはすでに目のあたりに行っている。そしてよくいわれることだが、いまでは時代遅れとなった自由浮動的な知識人には、現代科学で武装した専門家の結論に疑問を差し挟む余地はないのである。

〈中略〉

けれども、現在のあらゆる兆候に反して、もしアメリカ合衆国が、今日熱心に支持されているイデオロギーや公認の社会組織の形態を世界の多くの地域に課すために使っている暴力や破壊という恐ろしい手段を思いとどまるとしたらどうだろう。にもかかわらず、合衆国で実現しうる文化の水準が世界にとって圧倒的に重要であるということは依然として変わらない。もし私たちが真にユートピア主義者でありたいと望むのなら、過去および現在の歴史から判断して、近代化の必然的な相関物であるようにみえるテロリズムを多少とも軽減するためにアメリカの富を使うという可能性を模索すべきかもしれない。知識人は、これまで何世紀にもわたって提起されてきた問いに真剣に注意を払い、社会が実際にトマス・ホプズのいう「万人の万人に対する闘争」なのかどうかを問い直し、「飢餓に瀕する多数の群衆が必要品を欠いているのに、一握りの人間があり余る贅沢な生活をしている」のは自然の権利に反するというルソーの抗議の現代的な意味を探求する可能性を考えることもできるだろう。知識人は、ニカラグアで生まれた子どもたちの半分以上が五歳になる前に死亡しているということ、あるいはそこから2~3マイルしか離れていないところに、言語に絶する貧困、残虐な人権の抑圧、絶望的な未来しかない場所があるということを知っても、全く動じることがない富と特権を享受する者たちが直面し、あるいは回避してきたモラルの問題を取り上げることになるだろうし、こうした事態をいかに改革できるのかという知的な問いを提起することになるかもしれない。もしもアメリカの知識人がこうした問いを熱心に取り上げるのなら、社会に計り知れない文明上の影響を及ぼすことができるだろう。しかし実際には、アメリカの知識人はこうした問いを軽蔑し、単なる意味のない感傷だと考えそうであり、そうだとす

れば、私たちの子どもたちは、啓蒙と自らを導いてくれる指針を求めて、どこか別の場所を求めて彷徨うことにならざるをえないのである。

出典：ノーム・チョムスキー、清水知子・浅見克彦・野々村文宏訳『知識人の責任』青弓社（2006）より出題者が抜粋・編集

（原著は Noam Chomsky, "Some Thoughts on Intellectuals and the Schools", *Harvard Educational Review*: 36, 1966)

## 【資料 2】

一般に、植民地ナショナリズムの勃興にとって、インテリゲンチア（＝知識人）が決定的役割をはたしたことはよく知られている。それは、植民地主義によって、原住民の大土地所有者、大商人、企業家、さらには専門職業者の一大階級というものが、比較的まれな存在とされていたためであった。経済力は、ほとんどどこでも、植民者自身によって独占されるか、あるいは、政治的に不能な<sup>バリア</sup>賤民（非原住民）事業家の階級——植民地アフリカにおけるレバノン人、インド人、アラブ人、植民地アジアにおける中国人、インド人、アラブ人——と植民者のあいだで不均等に分有されていた。さらにまた、インテリゲンチアが前衛的役割を果たすようになったのは、かれらの二重言語読み書き能力、あるいはむしろ、かれらの読み書き能力と二重言語能力によったということも一般的に認められている。出版物を読みまた書くこと、これによって、すでに述べたように、想像の共同体は均質で空虚な時間の中を漂っていくことが可能となったのだ。二つの言語を使いこなすということは、すなわち、ヨーロッパ国家語を経由して、もっとも広い意味での近代西欧文化、とくに 19 世紀に世界の他の地域で生み出されたナショナリズム、国民、国民国家のモデルを手に入れることができるということであった。

1922 年、バタヴィアのオランダ植民地体制は、ハーグに率先して、フランス帝国主義からのオランダ「国民解放」百年記念の大祝典を植民地全土で主催した。現地のオランダ人とユーラシアンのコミュニティばかりでなく、支配下の原住民も祝典に物理的に参加し、また寄付を行うよう命令が出された。これに抗議して、初期のジャワ・インドネシア国民主義者、スワルデイ・スルヤニングラットは、オランダ語で、有名な新聞論説「もし私がオランダ人であったならば」を書いた。

私の考えでは、もし我々が(ここでは私は依然として想像上オランダ人なのであるが)原住民に対して我々の独立を祝うようにすすめるならば、それはたんに不適切だというばかりでなく、見苦しいことでもある。まずなによりも我々はかれらの名誉心を傷つけることになる。なぜなら、我々は、現に我々が支配している国で我々の独立を祝うからである。我々は、百年前に我々が外国人の支配から解放されたことを歓喜の念で迎えようとしている。そしてそれをいま、我々が支配している人々の目前で行おうとしている。かれらもまた我々と同様、かれら自身の独立を祝福する時が訪れることを待ち望んでいるのでは

ないだろうか。それとも、我々は、これらすべての原住民は我々の統治の結果、その精神をまったく喪失させてしまったとでも考えているのであろうか。もしそう考えているのだとしたら、我々は自己欺瞞をおかしていることになる。なぜなら、すべての共同体<sup>コミュニティ</sup>はたとえいかに未開であるとしても、すべての植民地支配を拒否するものだからである。もし、私がオランダ人であったならば、私は我々自身がその独立を剥奪している国で独立の祝典を行うことはないであろう。

こうした言葉で、スワルディは、オランダ・ナショナリズムと帝国主義の溶接部を大胆にこそぎ落とし、オランダの歴史をオランダ人に対して突きつけた。しかも、彼自身を想像上、一時的にオランダ人に変身させることで（それはまた逆にオランダ人読者を一時的にインドネシア人へと変身させようとするものであった）、彼はオランダの植民地支配イデオロギーの底にある人種主義的運命論そのものの土台を突き崩した。スワルディの激しい攻撃——それはオランダ人読者をいらだたせ、インドネシア人読者を大いに喜ばせた——は、20世紀に世界中いたるところでみられた現象の模範的事例であった。

出典：ベネディクト・アンダーソン、白石さや・白石隆訳『想像の共同体』NTT出版（1997）より出題者抜粋・編集

（原著は Benedict Anderson, *Imagined Communities: Reflections on the Origin and Spread of Nationalism*, Verso, 1983）

### 【資料3】

わたしが主張したいのは、知識人とは、あくまでも社会のなかで特殊な公的役割を担う個人であって、知識人は顔のない専門家に還元できない、つまり特定の職務をこなす有資格者階層に還元することはできない。わたしにとってなにより重要な事実は、知識人が、公衆に向けて、あるいは公衆になりかわって、メッセージなり、思想なり、姿勢なり、哲学なり、意見なりを、表象<sup>レプリゼント</sup>＝代弁し肉付けし明晰に言語化できる能力にめぐまれた個人であるということだ。このような個人になるにはそれなりの覚悟がいる。つまり、眉をひそめられそうな問題でも公的な場でとりあげなければならないし、正統思想やドグマをうみだすのではなく正統思想やドグマと対決しなければならないし、政府や企業に容易にまるめこまれたりしない人間になって、みずからの存在意義を、日頃忘れ去られていたり厄介払いされている人びとや問題を表象<sup>レプリゼント</sup>＝代弁することにみいださなければならないのだ。知識人は、こうしたことを普遍性の原則にのっとっておこなう。ここでいう普遍性の原則とは、以下のことをいう。あらゆる人間は、自由や公正に関して世俗権力や国家から適正なふるまいを要求できる権利をもつこと。そして意図的であれ、不注意であれ、こうしたふるまいの規準が無視されるならば、そのような侵犯行為には断固抗議し、勇気をもって闘わねばならないということである。

このことを、個人的な観点から語らせていただこう。わたしは知識人として、聴衆あるいは支援者のまゝで自分の関心事を披露するわけだが、ここには、わたしがいかにして自分の論点を明確にするのかという問題のみならず、わたし自身が、自由と公正という理念を促進支援しようとする人間として、何を表象<sup>レプリゼン</sup>するかという問題ともからんでくる。わたしは、これこれのことをしゃべったり書いたりするわけだが、それは熟慮のすえ、そうしたことがらこそ、自分の信ずるところのものであると納得したからであり、同じ考えかたをしてくれるよう他人を説得したいからである。したがって、私的な世界と公的な世界とは、きわめて複雑なかたちで混ざりあっている。いっぽうには、わたし自身の歴史があり、わたしの経験からひきだされたわたしの価値観や、わたしの書いたものや、わたしの立場がある。そしていまいっぽうには、こうしたことがらを吸収する社会的な世界があり、そこでは戦争や自由や公正について人びとが議論したり決断をくだしている。私的な知識人というものが存在しないのは、あなたが言葉を書きつけ、それを公表するまさにその瞬間、あなたは公的な世界には入りこんだことになるからだ。しかし、かといって、ただ公的なだけの知識人というものも存在しない。目的なり、運動なり、立場なりの、たんなる表看板、たんなる代弁者、たんなるシンボルとして存在する人間などないのだ。つねに個人的な曲解があり、私的な感性が存在する。そして、個人的な曲解なり感性が、いま語られつつあることや、書かれつつあることに、意味をあたえるのである。また、聴衆に迎合するだけの知識人というものは、そもそも存在してはならない。知識人の語ることは、総じて、聴衆を困惑させたり、聴衆の気持ちを逆なでしたり、さらには不快であったりすべきなのだ。

したがって、結局のところ、重要なのは、代表的<sup>レプリゼンタティヴ</sup>〔＝代弁する〕人物としての知識人のありかたである——なんらかの立場をはっきりと代表<sup>レプリゼン</sup>＝表象する人間、また、あらゆる障害をもともせず、聴衆に対して明確な言語表象をかたちづくる人間。わたしの論旨は、知識人が、表象＝代弁する技能を使命としておびた個人であるということにつきる。

出典：エドワード・W・サイード、大橋洋一訳『知識人とは何か』平凡社（1998）より出題者が抜粋・編集  
（原著は Edward W. Said, *Representations of the Intellectual*, Vintage, 1994）

#### 【資料 4】

知識人とは逆説的な存在で、自律性か社会参加か、純粋文化か政治かという避けがたい二者択一を通して把握するのでない限り、知識人として考えることができない。それは知識人が歴史的に言って、この対立を乗り越える中で、また乗り越えることで形成されてきたからだ。

〈中略〉

知識人とは二面性をもった存在で、自分が固有の法を尊重している自律的な、すなわち宗教的・政治的・経済的権力からは独立した知的世界によって固有の権威をさずけられるとき、

かつこの固有の権威を政治闘争に投入するとき、はじめて知識人として存在し存続することができる。いわゆる「純粹」な芸術や科学、文学などを特徴づけている自律性の探求と、政治的有効性の探求とのあいだには二律背反的な関係が存在すると普通は信じられているが、じつはむしろみずからの自律性を、そして中でも特に、種々の権力にたいする批判の自由を増大させることによってこそ、知識人は政治行動の有効性をも増大させることができるのであり、そうした政治行動の目的や手段は、文化生産の場に固有の論理の中にその根拠を見出すのである。

〈中略〉

文化生産の世界の自律性を擁護することを目的とする真の知識人インターナショナルを建設することが今日の緊急の課題である。

〈中略〉

この闘争は集団的なものでなければならない。なぜなら、知識人に及ぼされている権力が有効性を発揮しうるのは、彼らがそれらの権力にたいしてばらばらに、しかもたがいに競合しながら立ち向かっているという事情にその原因の大部分があるからだ。また、こうした動員の試みは、それがひとりの知識人やひとつの知識人グループのリーダーシップを確立するための闘争に利用されているのではないかと疑われる可能性がある限り、常にうさんさく、挫折を運命づけられているからでもある。文化生産者たちは、「組織的知識人」の神話を決定的に放棄すると同時に、すべてから身を引いた特権的知識人という、その裏返し神話にも陥ることなく、自分たちの固有の利害を守るべく集団的に努力することを受け入れるのでない限り、社会世界の中で自分に本来与えられているはずの場所を見出すことはできない。そのためには、テクノクラートにたいして批判と監視を、さらには提案をおこなうインターナショナルな力として自己主張することが必要となるだろう。あるいはもっと高度な、と同時にもっと現実主義的な野心、すなわち自分固有の領域に限定された野心によって、私たちが〈理性〉と呼んでいるものの物質的・知的手段が生産され再生産される、あれらの特権的な社会的圏域の自律性を保証する経済的・社会的条件を守るための、理性による行動に参画することが必要となるにちがいない。この理性のリアル・ポリティクスは疑いもなく、既得権益を保守する同業組合的なコーポラティズムではないかとの嫌疑をかけられることになるだろう。だが、この理性のリアル・ポリティクスが普遍のコーポラティズムに他ならないことは、その自律性を保証する諸手段、多くの困難を克服して獲得した諸手段がいかなる目的のために役立てられているかが明らかになることによって示されるであろう。

出典：ピエール・ブルデュー、石井洋二郎訳『芸術の規則 II』藤原書店（1996）、加藤晴久『ブルデュー 闘う知識人』講談社選書メチエ（2015）より出題者が抜粋・編集

（原著は Pierre Bourdieu, *Les Règles de l'art : genèse et structure du champ littéraire*, Seuil, 1992）

## 【資料5】

現代の西洋文明は、ローマ帝国が滅亡してから現在に至るまでおよそ千数百年の間に成長したものであって、由来はきわめて古い。わが日本も、建国以来すでに2500年の歴史があり、その独自の文明は自ら進歩して達するところに達している。とはいえ、これを西洋文明と比べてみると、だいぶ方向性がちがっている。

嘉永6(1853)年にペリーが来て、その後、西洋諸国と貿易条約を結んでから、わが国の人民ははじめて西洋の存在を知り、その文明の有様がわが国と大いに異なっていることを知って驚き、人心の騒乱を生じた。もちろん、日本の2500年の歴史の中で、世の治乱によって世の中の人々が驚いたことはなかったわけではないが、人心の内部にまで入って深い印象を与えた点では、古代に中国から儒教や仏教が伝わったこと以来では、最近の外国との交流が最大のものだ。

〈中略〉

この人心騒乱の結果生じたものが、王政復古であり廃藩置県であった。以降、今日に及んでいるわけだが、制度が大きく変わったからといって、外国交際の衝撃は小さくなったわけではない。戦争は数年前に終わって、すでに跡形もないけれども、人心の騒乱は依然として存在しているどころか、ますます激しくなっている。

私は、この人心の騒乱というのは日本国民が、文明に進もうとして発憤しているということだと思う。いままでのわが国の文明に満足せず、西洋文明を手に入れたいという熱心さのあらわれなのだ。これは、わが国の文明が西洋文明に並ぶか追い抜くまで止まないだろう。ただし、西洋文明もまた、いままさに日に日に進歩している最中ではあるから、わが国の人心もこれにともなって動き続け、停止することはないだろう。実に、嘉永年間にペリーが来たことは、わが国の人民の心に火をつけたもので、一度燃えた以上は、もうこれを止めることはできないのだ。

〈中略〉

どの国どの時代でも、人民の中には非常に愚かな人間や非常に賢い人間というのはたいへん少ない。世の中に多くいるのは、賢い者と愚かな者の中間にあって、罪もなく功績もなしに世論にあわせて一生を送る人々だ。これらが世間の通常の人々なのだ。世論というのは、こういった世間の普通の人々の間に生まれる議論であって、それこそがいまの時代を映し出すものなのだ。こういった「世論」は、過去を反省することもなく、また未来を予見するでもなしに、動いて止まることがない。しかし、世間ではこういう人間が多い。世論を物事の基準にし、それから外れることがあれば、異端だとか妄説だとして、すべての議論をこの世論の枠内に押し込めようとする。これは何のつもりか。こんな状態では、智者というのは国のためにいったい何をすればいいのか。将来を予測して、文明へと歩もうとする者はだれに頼ったらよいか。考えが足りないにもほどがあろう。

試しに見てみよ。古来文明の進歩というのは、最初はすべて異端や妄説からはじまったのだ。

〈中略〉

したがって、かつての異端妄説は、いまの常識であり、昨日の奇説は今日普通に話されているのである。であれば、今日の異端妄説もまた将来の常識や普通になることだろう。学者は世間のやかましさに負けず、異端妄説と言われることを恐れることなく、勇気を持って自分で思う所の説を吐くべきなのだ。あるいは、他人の説を聞いて自分の意見とあわないことがあっても、相手の言いたいことをよく考えて、受け入れるべき点については受け入れ、そうでないものはそのまま相手におまかせにして、将来意見が一致する時を待つべきなのだ。これはすなわち「議論の本位を同じくする日」である。他人の説を無理に自分の説の範囲内に収めて、天下の議論を統一してやろうなどということは、考えなくてもよいのである。

というわけで、物事の利害得失を論じるには、まずその利害得失の軽重と是非を明らかにしなくてはならない。利害得失を論じるのは簡単だが、軽重と是非を明らかにするのはとても難しい。個人の利害で天下の利害を考えてはいけなし、一年間の便不便で百年の計画を誤ってもいけない。古今の論説を多く聞き、世界の事情を広く知り、虚心に冷静に何がいちばんよいのか、という点を明らかにしなくてはならない。数多くの妨害にも負けず、世論に束縛されることもなく、高い見地からいままでの歴史を見、生きた目をもって未来を見通さなくてはならない。

私は、議論の基準を定めて、これに達するための方法を明らかにし、天下の人々の意見をみな自分と同じ意見にするという大それたことを企てているわけではない。しかし、あえて一言いっておこう。いまこの時に当たって、さあ、前に進もうというのか、それとも後ろに退こうというのか。進んで文明の道を歩むのか、退いて野蛮へと返るのか。ここは進むか退くかの二者択一だ。

〈中略〉

西洋諸国を文明国というのも、正確にはいまのこの世界にいてそう言える、というだけのことである。これを細かに論じれば、足りないものはたいへんに多い。

〈中略〉

〈しかし〉いま世界中の各国において、たとえその様子は野蛮や半開であっても、かりにもその国の文明を進歩させようとするれば、ヨーロッパの文明をまずは目的として議論の基準を定めて、そこから物事の利害損失を論じなければならない。

〈中略〉

では、何を指して「文明」と名付けるのだろうか。

それは、「人の身を安楽にして心を高尚にする」ことを言うのである。「衣食を豊かにして人格を高める」ことを言うのである。しかし、身の安楽だけを文明と言ってしまって本当にいいのか。人生の目的は衣食を得ることにとどまるものではない。もしこれだけが目的であれば、人間はアリやミツバチのようなものだということになるだろう。これを天から与えられた使命とは言えまい。では、心を高尚にすることをもって、それだけで文明と言ってしまって本当にいいのか。それでいいなら、世の中の人全員、「陋巷にあって水を飲んでい

た」とされる顔回<sup>1</sup>のようになってしまうことだろう。これもやはり天から与えられた使命とは言えまい。

心身ともに十分でなければ、それは文明とは言えないのはもちろんだが、しかし、物質的な安楽にも、また心の高尚さにも限度というものはない。したがって、「安楽である」とか「高尚だ」というのは、さらに高いところを目指して進歩している状態のことを言うと考えべきだ。そしてこのような進歩を可能にするのは、人間の知性であり徳性であるのだから、文明とは結局、「人間の知性と徳性の進歩」と言ってよいのである。

出典：福澤諭吉著、齋藤孝訳『現代語訳 文明論之概略』ちくま文庫（2013）より出題者が抜粋・編集  
（原著は1875年刊）

### 【資料6】

総合政策学部と名付けたのは今の日本に欠けているのは何かということから出発している。今日本が問題を抱えているのに、その問題の所在を発見できず、しかもその問題をどう解くこともできず、その問題をまた自分でデザインすることもできないという嘆かわしい状況にきている。このような状況を突破するためには、今の日本のあらゆる職場でつくられてしまったセクショナリズムを打破するしかない。

〈中略〉

こうしたものがある限り、日本の発展ができなくなるのは当たり前だし、また、どうしてそういうことがおこるのかも問題である。それは、ある意味で、既存の学問が作りあげたものであるのかもしれない。既存の学問は、常にその細かい分析をしていくことに学問としての成果が上がると考えている。分析とは細かくわけていくことだから、分ければ分けるほど、学問が発達すればするほど、セクショナリズムは強くなっていく。

現在でも経済学部を卒業したものと、法学部を卒業したものと、商学部を出たものと、文学部を出たものは、すべてそれぞれ学問の体系がちがうのだと思っている。そこでそうした学問の体系がちがうのだからこうした学問を通じて私たちは、自分の考え方がそこにしばられてしまうことになる。学問にとらわれるという言葉があるが、まさに近代科学は分析することにおいて成果はあげたけれども、それをやればやるほど現実から遠くなっていった。

すべての他のものは一定にしておかなければ、答えを出せないわけだから、したがってそのような分析をしている限り、実験室ならともかく、現実には科学は絶対に総合的な行動を示すことにはならないだろう。

〈中略〉

<sup>1</sup> 孔子の愛弟子の顔回が、貧しい陋巷（ぼろぼろの路地）に住みながらも、学問に励み楽しみを見出す清貧の生活を送ったという逸話に由来する例え。

総合政策とは、まさに子供のときから選択をするにはどうすればいいかを考えるということである。どんな赤ん坊でも、目の前に ABCD という四つの食べ物がおかれたならば、どれが一番好むかはその子供たちが判断することである。そのような判断のために、より良い基礎が必要となってくる。たとえば、砂糖が入っているものはおいしいけれども、あまり食べないほうがいいのか、あるいは、カルシウムが入っているもののほうがより良いとか。このような判断をすることは子供のときから行われているのである。

やがてそれは、経済的なものになってきて、たとえば東京から大阪に行くときには飛行機でいくのがいいのか、新幹線でいくのがいいのか、バスで行くのがいいのか、といろいろ考えるであろう。そうした判断の基準は、総合的な判断でしかないのである。

つまり、行動を行うとき、ある選択を行うときには、必ず総合的に考えて行っているのである。そのように総合的にものを考えるということは、経済学だけで考えることはできない。法律学だけでもない。政治学でもできない。商学だけでもできない。つまり、あらゆる学問がその基礎にあって、そのあらゆる学問に矛盾しないで行うことができこそ、はじめて判断ができるのである。このような、総合的判断というものは、おそらく、人間が正しいとか悪いとかいう判断をするときにも同じように行われるであろう。すべての学問に反しないような合理的な基礎が必要である。その合理的な基礎があってそれを自らが経験し、はじめてそれを納得したとき、それは私たちの判断となる。

〈中略〉

総合政策というものは、単に国が考えるだけではない。個人の判断選択の中にも、すべて総合政策が基礎となっているのである。こうした学問的な態度を養わなければ、経済学も法律学も商学も文学も、私たちの人生に役立つように使うことはできないだろう。

出典：加藤寛『慶應湘南藤沢キャンパスの挑戦』東洋経済新報社（1992）より出題者が抜粋・編集